第143回簿記検定試験 3級 出題の意図

[第1問]

(出題の意図)

本問は、3級の学習範囲における基本的な取引についての仕訳問題です。問題文をよく読み、文章の意図する勘定科目を用いて処理を行うことが大切です。本問では、付随費用や当店負担コストの処理対応を含め、基本的な取引の仕訳処理を正確に行えるかを問うています。注意点等は次のとおりです。

1. 株式取得時の取得価額の算定と使用する勘定科目について問うています。
2. 商品の仕入れにあたり生じる引取費用は、仕入原価に含めて計上します。
3. 売掛金の回収が得意先からの振込みにより行われる場合、手数料をどのように処理するかを問うています。本問では、手数料を当店負担とするとありますので、当店の費用として計上します。
4. 業務使用目的の複合機の購入は、その使用目的および購入金額から何勘定で処理されるのかを問うており、また取得にかかる搬入設置費用はその取得原価に算入されます。代金のうち分割払いによる部分は、取引日時点では未払いということになります。
5. 従業員の給料から源泉徴収した所得税は、所得税預り金（負債）として処理されています。本問では、納期の特例承認により6か月分の所得税をまとめて納付しています。

[第2問]

(出題の意図)

本問は、取引がどの補助簿に記帳されることになるかを問う問題です。どの取引も基本的なものであるため、確実に正解することが望めます。補助簿には、特定の取引の内訳・明細を示す補助記入帳と、特定の勘定の内訳・明細を示す補助元帳があります。本問では、その両方についての帳簿を含み、商品有高帳・売掛金元帳・買掛金元帳は補助元帳、それ以外の帳簿は補助記入帳に分類されます。

解答にあたっては、それぞれの取引を仕訳し、補助簿に記帳する流れを考えてみると良いと思います。仕訳を起こせば、勘定科目からどの補助簿に記入されるかが分かります。ただし、商品の仕入れと売上げ時には商品原価の変動（増加・減少）が生じるため、商品有高帳にも記入を行う点に注意が必要です。

[第3問]

(出題の意図)

本問は、一部の主要な勘定記録、得意先元帳および付記事項から、1か月間の取引を推定し、残高試算表および得意先元帳を完成させる問題です。取引データの多くは、すでに各勘定に転記済みですので取引を仕訳化し、転記する必要はありません。勘定間や補助元帳とのつながりから、一部の推定箇所についての金額を把握し、取引を集計することを出題の意図としています。

勘定の月初における残高は、過去の合計記入の貸借差額により求められます。これが、試算表の月初残高欄に入ります。当月の勘定記録のうち金額の推定が必要な箇所については、上記の意図にあるとおり、勘定間や補助元帳とのつながりから把握することができます。与えられた勘定については、貸借差額で当月末の残高を計算し、試算表に記入します。主要な勘定以外については、相手勘定科目、付記事項に注意して個々の勘定ごとに集計を行います。得意先元帳は、売掛金勘定とのつながりをもとに金額を推定することになります。

[第4問]

(出題の意図)

本問は、取引を仕訳しそれを正しく起票できるかを問う、伝票に関する基本的な問題です。一部振替取引（一部現金取引）については、

(1) いったん全額を掛け取引として起票し、そのあとで入金取引または出金取引があったとみなして起票する方法

(2) 現金取引と振替取引に分けて記票する方法

の2つがあります。

第4問は、未完成の伝票から、提示された振替取引が上記のどちらの方法で起票されているのかを推定し、伝票を完成させるものです。

取引をそれぞれの方法で起票するとき、起票のための仕訳が正しくできるかどうかを問うています。

[第5問]

(出題の意図)

本問は、決算日に判明した事項および決算整理事項にもとづいて、精算表を作成できるかどうかを問う問題です。主な論点は以下のとおりです。売上原価を売上原価勘定の行で計算することを除けば、精算表作成に関する問題としてはいずれもごく基本的な問題です。

- 〈決算日に判明した事項〉
- ①現金過不足の整理
 - ②誤記入の判明－訂正仕訳

〈決算整理事項〉

- ③仮払金勘定の整理
- ①売上原価の計算（売上原価勘定）
- ②貸倒引当金の設定
- ③減価償却費の計上（期中購入備品を含む）
- ④消耗品の整理
- ⑤前払保険料の計上
- ⑥未収利息の計上